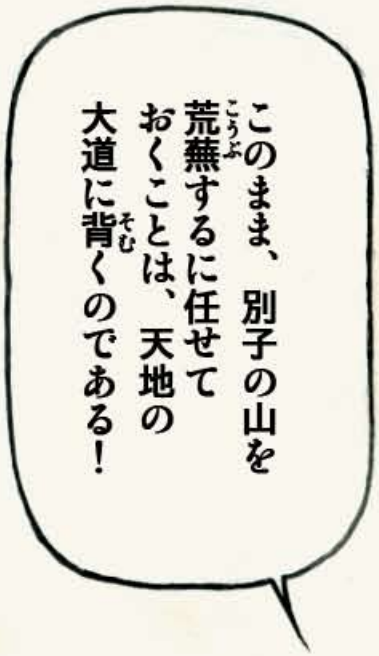
住友四百年

源泉



第十二話「緑なす山」

作：西ゆうじ　画：長尾朋寿

◎この作品は、住友の歴史を参考にして創作された物語です。◎

伊庭支配人は
どれぐらい植林
なさるんやろう？

これまで一番多い年は、
明治十一年の二十三万
八千八百一本やが、
その倍ぐらいかの？

そんなに仰山
植え続けるんか!?

本年明治二十七年には、
まず約三百四十七万本、
植林致します！

…おおっ！

さあ、木を
植えましょう、
みなさん！

住友は伊庭貞剛の指揮の下、
翌年翌々年には、四十万本前後、
その次年には百二十万本、更には
百三十五万本、百四十五万本と
植林を続けていったのです。

伊庭支配人、新年おめでとうございます。

うん、おめでとう。

次に住友が伊庭の指揮の下に取りかかったのは、銅製錬所が原因の煙害問題でした。その解決に何よりも重要だと考えたのが、人間なのです。

塩野君、住友に戻って来てくれるんだね。

はい。支配人。

住友初の留学生で、惣開製錬所の設計を担当した鉱山技師の塩野門之助は、このとき住友を離れて、足尾銅山に移っていたのですが、それを呼び戻したのです。

我が住友はお国のために銅の増産を計って来た。しかし、そこから生まれた煙害は、地元の人々を地獄に陥れている。

人々を不幸にして、営利を貪るなどということは絶対にしない。
住友家法の『信用を重んじて確実であること』ですね。

その通り。被害者にはそれ相当の補償をすればいいという人もいるが、それでは信用は得られない。
全てを元に戻し、人々が安心して暮らせてこそ、信用を得られる。

それで支配人は、枯れてしまった山に植林を大々的にお始めになられたのですね。

うん、しかしいくら木を植えたとしても、煙害を解決出来なければ駄目なんだ。

山根製錬所は閉鎖の準備に入っているが、一番問題なのは、惣開製錬所なんだ。

塩野門之助、身命を投げ打って、煙害に立ち向かいます。お任せ下さい！

頼むぞ、塩野君。

同明治二十八年五月四日。
尾道支店に住友の全重役が
招集されました。

これまで住友は両替商、
質屋という形で金融業も
営んで参りましたが、

近代企業として歩む今、
欧米各国の例を見るように、
銀行を置いて金融の円滑を
なすべき。

住友初の重役会議が
開催されたのです。その席上、
住友銀行の設立、本店の移転新築、
海外貿易の拡張、石炭業と
神戸茶業の方針、蔵目喜鉱山の
改革等が、決議されたのです。

そしてその年、
明治二十八年十一月一日、
住友銀行は開業致しました。

ザパー!!

ザザー!

塩野君。
人目を憚って、
こんなところに私を
連れ出したのは、
煙害対策が
出来たんだね。

ザー…

はい。
まずはこれを
見て下さい。

この新居浜から北方
約四里(20㎞)沖に
ある四つの無人島の
四阪島に、惣開製錬所を
はじめ全ての工場を
移すのです。

あの惣開製錬所を
無人島に移す…
そういう手が
あったか。

明神島
梶島
家ノ島
瀬戸内海
鼠島
美濃島

はい。この四阪島は、今治や西条からも新居浜と同じぐらい、伯方島や大島ともそれなりに離れていますから。

煙は届かずに海上に離散するというわけだね。

ザー
ザザー

お金は掛かります。住友の一年や二年の売り上げを要するようになるかもしれません。しかし人々は助かり、安心して生活が出来、山も甦ります。

それ以上の金が掛かろうとなんとかする。それより、四阪島には水はあるのか？

ありません。働く社員達の飲料水は、新居浜から船で運ぶしかないです。

ザザー

飲料水は水船を造ればいいが、大量に必要な熔鉱炉の冷却水はどうする？

ザー

ザブー

海水を用います。
海水を使うと爆発するという話を聞いたことがあるが大丈夫なのかい？
ザザー

はい。ここ数ヶ月かけて何度も実験しましたが、問題は全くありませんでした。

よし、すぐに実行！四阪島を詳しく調査して買収だ。ただし、隠密裏にだぞ。

了解です。では、釣り人を装って調査します。
買収も住友がやると知れると、様々な障害が生まれる恐れがある。この伊庭個人が買い取るように見せかけよう。

この年十一月、四阪島を約九千三百円で買収すると、すぐに所轄の農商務省に、新製錬所建設を申請、翌年十二月に許可を受け、明治三十年二月八日に着工したのです。
それは名案です！
いや、君の釣り人案には負けるよ。

煙害対策として四阪島に
銅製錬所を移転させると
いうのは、単に新製錬所を
建設するだけでは
済みませんでした。
水を運ぶ水船を四隻、
鉱石・資材運搬船を二十四隻、
それらの船を曳船する
汽船二隻を建造。

そして一万数千人の社員とその家族の
住宅、病院、学校、風呂屋、各種商店、
劇場等、ひとつの町を新たに造ることも
必要だったのです。

そんな四坂島の新製錬所建設中の明治
三十二年（1899）八月二十八日。
別子銅山は元禄四年の開坑以来、
最大の惨事に見舞われたのです。

それは台風による山津波…大水害で、
倒壊家屋＝百二十二戸、
大破＝三十七戸、
死者＝五百十三人、
負傷者＝二十五人の大惨事を生み、
この年の荒銅生産高は
前年の三分の一と
なってしまったのです。

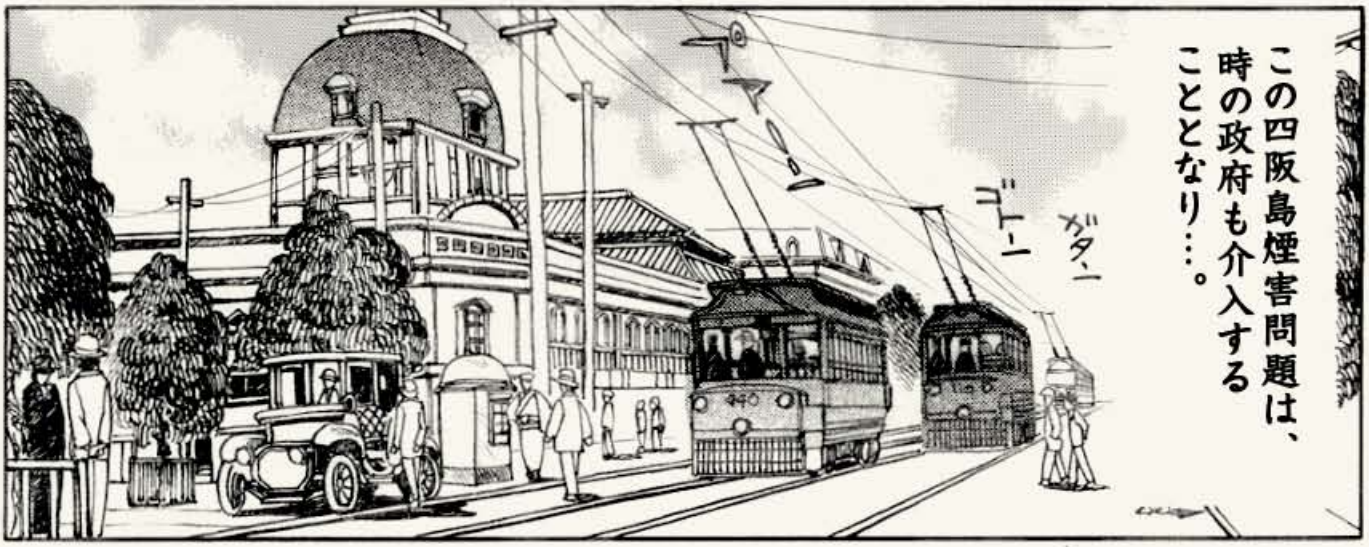
しかし住友は
負けませんでした。
別子鉱業所を新居浜村に
移転し、組織も近代化させ、
明るい日＝明日を自分達の
力で創りだすのだと
歩み出したのです。

明治三十七年（1904）七月、
四阪島の工事の一部が竣工し、
八月一日午前零時、別子山中の
大山積神社で元禄以来の焼鉱窯の火を
四阪島へ移す報告式が行なわれ、

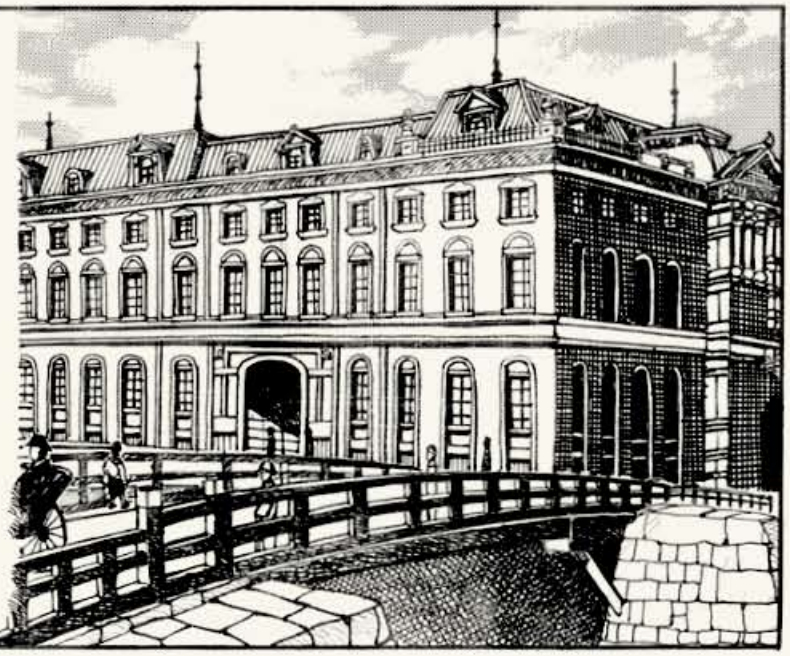
十月には熔鉱炉の試験を行い、
十二月にすべての工事が竣工し、

明治三十八年一月、
ついに住友四阪島製錬所は、
本格操業を開始したのです。

こうして煙害問題は解決したと
思った矢先…四阪島の遥か
向こうの対岸の今治方面の越智・
周桑郡の村々から、四阪島からの
煙が海を渡って畑を覆い、
草木を枯らすとの
訴えがあったのです。



この四阪島煙害問題は、
時の政府も介入する
こととなり…。



明治四十三年十月二十四日、
農商務省大臣、次官らの
立ち会いのもとで、住友と
地元住民の両者に話し合いが
もたれ、大臣裁定において
住友は、一カ年の製錬鉱量は、
五千五百万貫をもって
最高限度とし、賠償金を
支払うこととなりました。

また政府は「鉱毒調査会」なる学者の集まりを作り、大正三年、その会の答申で住友に、低い数本の煙突で煙を分散し、送風機による攪拌で亜硫酸ガスを放出し、近距離で海に落ちる煙害対策を命じました。

いつの世も同じ、政府や学者の考えで問題解決はなされるはずもありません。住友は独自で煙害研究と先進諸国への技術者派遣で新技術の導入に努めたのです。

はい。でも良い煙害根絶の方法があれば、いくらお金がかかろうともやるのが、住友ですから。
えらいの。
大したもんや。住友さんは。
そのなんやらいう装置のお陰か…近頃はうんと煙が減ったのお。
はい。確かに当初から比べると格段に亜硫酸ガスの数値は下がりました。
でも、まだまだです。だから住友の技術者達は寝食を忘れて研究に打ち込んでいます。
また諸外国に赴き、新技術を探しています。
ざわ…
ざわ
そういえばこの前、住友の人間が、ある国に新技術を求めて行ったら…。
住友の四阪島製錬所は、何%ぐらいの亜硫酸ガスを排出しているんですか？

はい。まだまだなんです。いろいろやった結果、0.2%ですから。

オー・マイ・ゴッド！

君、それだったら、住友の四阪島製錬所は世界のトップだよ。

いいえ、それでは駄目なんです。私達住友が目指しているのは、亜硫酸ガスの排出ゼロですから。

それこそCSR…企業の社会的責任の実践です。住友という会社は素晴らしいです。私も出来る限り協力させて下さい。

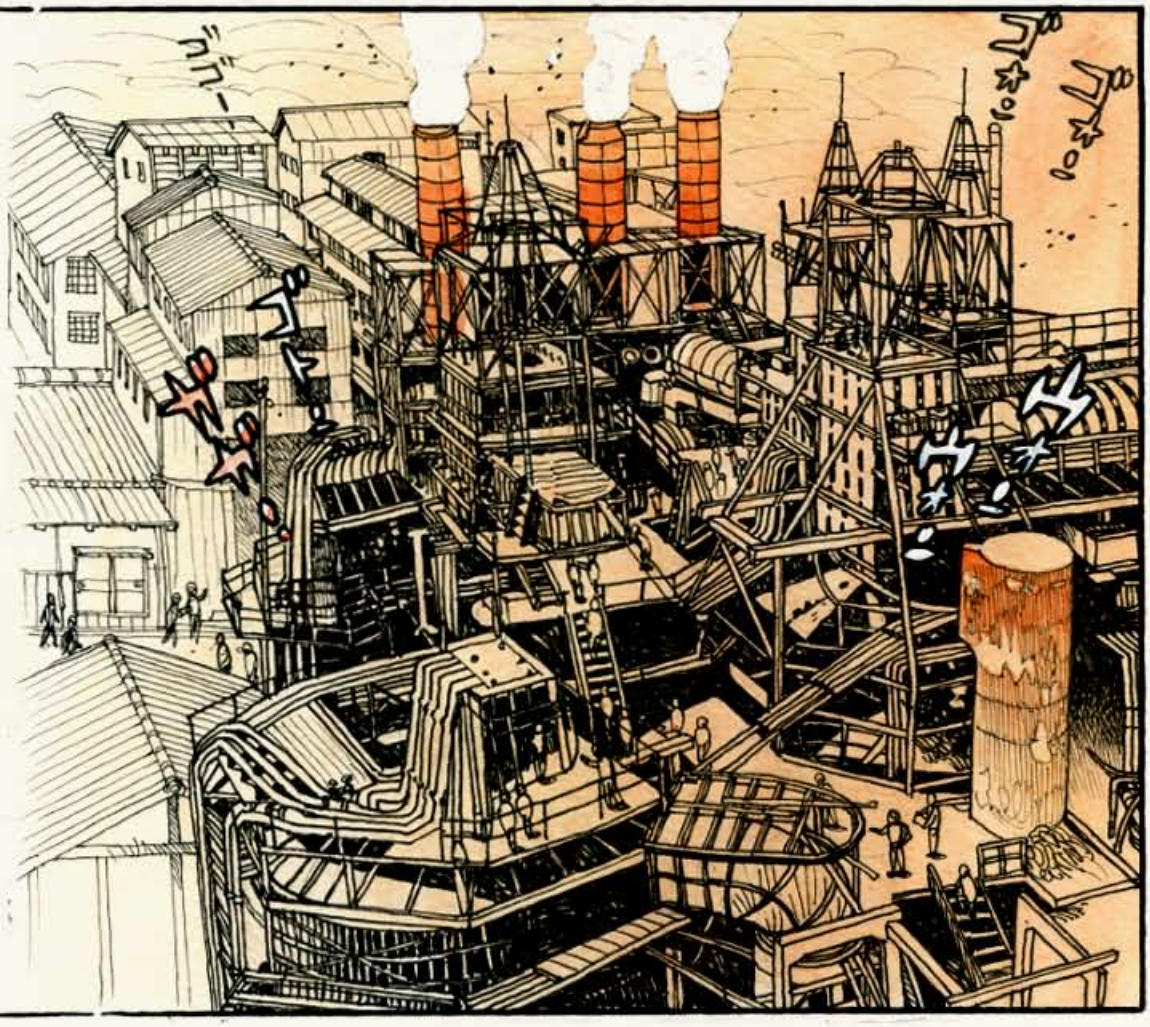
住友さんは大したもんや。

うん。他の銅山は何もせんと枯れたままやというのに、住友さんは違う。

一日も早よう、煙害がゼロになるといいのお。住友さんはみんなで頑張ってはるんやさかいに。

四阪島製錬所からの煙害根絶は、昭和に入ってからの大恐慌もあり、容易くはありませんでしたが、住友は諦めませんでした。

その結果、画期的な亜硫酸ガス除去法「中和法」を見つけ、昭和八年（1933）から試験運転を開始し、同十二年十二月には中和工場建設着手、同十四年十月十六日、竣工式と祝賀会を催し、ここに長年にわたった煙害を克服したのです。



住友はその間に、住友銀行（現：三井住友銀行）、住友倉庫を開業し、やがて住友生命保険、住友海上火災（現：三井住友海上火災）、住友信託銀行などへ広がりました。

明治三十年には
後の住友金属、住友電工、
住友軽金属となる
住友伸銅場の建設。また、
別子鉱業所の機械課は、
後に住友重機械工業、
山林課は、住友林業、
土木課は住友建設
（現：三井住友建設）
となりました。

そして大正二年、煙害対策で排ガスから
肥料を製造するために出来た
住友肥料製造所は、後に住友化学となり、
二十世紀の技術革新により、日本電気、
日本板硝子、住友ベークライトも生まれ、
住友の事業は拡大し、

第二次世界大戦、
戦後の財閥解体など苦難を乗り切り、
いまも明日に向かって歩んでいます。
そこには、初代文殊院政友から
四百年、脈々と受け継がれて来た
「住友の企業理念」＝たえず時代のニーズを
機敏に感じ取り、新たな事業に進出しつつも、
絶対に国家や地域社会の利益や要請に
応じて行くことを「大切なこと、人から人へ」と
忘れることはないからです。
その証のひとつが、
百年以上も前に枯れた別子銅山を
緑なす山に戻し、
煙害を根絶させたことなのです。

緑なす山に戻った別子銅山――。
初代文殊院政友から四百年。
受け継がれて来た
人を大切にする心が、
今日も脈々と息づいている――。

「住友四百年 源泉」完

資料協力：住友史料館、別子銅山記念館